

勤務となった。酒保では兵の階級などにかかわらず、全く万民平等と言った態度と言葉で対応したので、みんなから大変な人気ものであった。

昭和二十年八月八日、不法にもソ連軍が空陸両面から東安地区に侵攻してきた。

国境は日本軍が手薄だったので、無風状態の侵略となった。坊頭のソ連兵は日本人から、日本人の住宅から、どのような物でも手あたり次第ごとごとく略奪する。抵抗すれば殺傷する。女子を捕えてどこかへ連れてゆく。獣と全く同じ悪事を働くのを、日本人はただ傍観しているばかりだった。

浜崎さんは東安地区から統々とシベリア方面に連行されるのを傍観しながら、悲憤にたえなかった。とにかく日本へ引揚げるためにハルビンへと教化、吉林へと貨車や徒歩で、それから長春、瀋陽、錦州へと徒歩や貨車をみつけて乗せてもらう。そうした度に肌身に離さなかった金銭をいくらかずつ出さねば車は動かない。東安から乞食姿で、コロ島に着くまで丸々一年以上、野良犬のごとく山に野に、河川をわたり、市街地

をめぐり、全く飢餓、恐怖、酷寒、病魔をよくも克服して生きてこられたことと驚くばかりである。

豊子さんは、神仏の加護があったとしか思えないと声を詰まらるのである。

昭和二十一年九月、故郷の肉親と感激の涙雨ふるとしだった。

昭和二十八年四月神戸の運輸会社に入社し、昭和六十年まで勤務して退社。今は生活も安定し健康に恵まれ幸せである。これから公共の仕事に協力し、社会へ報恩のまことをつくす所存だと言われた。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## 世紀の大戦前後(惨苦の追想)

福岡県 大 瀧 猛

今年もまた八月十五日が来た。世人はこの日を終戦記念日という。この日は悲惨極まりない戦争に負けた

日、無条件降伏の日である。私は当時比島の山中で慟哭血涙を流し自決まで覚悟した。

静思すれば太平洋大戦による犠牲者幾百万人（約三百五十万人）太平洋の島々、南海の藻屑に中国の山野、寒いシベリア、灼熱のビルマ、東南アジア、日本内地にあつてはB29による大空襲、広島・長崎に投下された原子爆弾、敗戦前後の外地在留同胞の惨状（特に中国東北区満州）、筆舌に尽くし得ない戦争がもたらした地獄で終戦記念日どころか敗戦の地獄の日である。あゝ悪魔の日が再び訪れた。

私の身边にも多くの人が大戦の犠牲となつて逝つた。従弟木下富夫は東京銀行上海（中国）支店、銀行マンであつたが、召集されレイテ島で戦死、旧知の角町克己さんはビルマで戦病死、二人共若い妻と幼女がいた。紅顔の大瀧公は学徒動員され終戦の直前、満州白山地方でソ連軍により戦死、春をも知らず逝く。その他学友、拓友、教え子、数え挙げるとその数幾多、彷彿落涙言葉を知らず（約百七十余人）従妹（当時女学生）は大牟田空襲、家の焼失と共に全顔火傷のケロイド状

となり、現代医学最高技術の施療をしても（数回大阪医大に入院）傷跡は消えず先年病死、妻は満州開拓地で敗戦末期、男子は根こそぎ召集出征し老幼婦女子のみとなつた広野で悲痛な血涙を流し同輩婦女子の幼い娘は避難民ハルビン花園小学校で食うや食わずの末、チフスで病死、惨苦十か月、着のみ着のまま家も土地も財産もすべてを捨てて、丸坊主の男装に身をやつし、三歳で広野に散つた幼女の遺髪をふところに、命からがら開拓地開原城子河、ハルビン、新京、奉天を経てコロ島より敦賀港、九死に一生死に神からのがれ帰国した、開拓の旧友浜川さんの奥さんは幼児一人をやつと連れ帰国上陸の波止場で安心されたが永眠。幼児だけ生きて父母の祖国に帰りついた。

私の身边には終戦前後の開拓地惨苦の実相がいくつも惹起しました。いたましいことで脳裏より離れ得ません。渡辺さんは奥さんが敗戦前長男（五歳）次男（三歳）の子を遺して病気で亡くなられたので後妻を郷里山形から娶り、その母親と娘が開拓地へ同伴渡満され、戦争の激化帰国の機会を失ない敗戦、奥さんは

お腹に子供が、渡辺さんは戦争末期召集されましたが敗戦除隊ハルビンで幸いにも再会、五人家族となったが衣食住に困り果て、子供二人満人に委託しましたが、不幸にも発病、三人共前後して逝かれて一家全滅です。

(子供調査するも不明)。また興安北省三河開拓の岡部さん家族たちの避難引揚中途、興安嶺の密林さまさまな悲惨な哀話(彼は関東軍に応召中、現栃木県南ヶ丘観光牧場経営)また城子河開拓団の水上さん妻子引揚避難中の惨事、彼は応召転属熊本で終戦、家族安否の渡満の術もなかった。先年来数回中国に行き日中友好に尽力して恩讐の彼方の実演者の感がする盟友の一人である。

私は鏡泊以来開拓の同志一家の惨苦な出来事のペンを取るのに涙が流れ永眠された方々の冥福を祈らずにいられない。

しかし、敗戦の星は流れる中にもこんな残留孤児に幸運がめぐり来しました。昭和五十二年私たち開拓関係者三十三年忌の法要を長野の善光寺でしました。その折、青森の婦人が引揚孤児と共に参加同席された際の

話によると、

終戦前後のハルビンは北満の開拓民はじめ在留邦人が命からがら集合し衣食住なく生命すら明日のない日々、その時国境の凌雲義勇隊団長佐藤修氏が避難して来られ、(彼は城子河開拓団長寧安訓練所長の前歴があり、加藤完治の門下、開拓五羽鴉の一人と称され豪放磊落)これを黙視するに忍びなく妻子をハルビンに残し撫順は南満で有名な炭鉱地、衣食住どうにかなる思慮のもと移転隊長となり撫順行決行、青森の婦人はその時の同行婦女子の一人でした。妻子同伴移動をしない心情私の師でもあり、理解されます。彼は古武士の気質を持った仙台伊達藩生まれです。

昭和二十一年九月引揚げが開始され、その子は三歳、生母はこの子を現地人に託しての帰国です。「子を棄つる者はあれども身を棄つる者はなし」の言葉があります。が、避難の途中に子を捨てたまた殺して来た。なにがしかの品物や金銭を差し出して我が子をくれたりあずけたり、哀話は数多い。ハルビン収容所の裏庭で少しの衣料、食料、お金と子を交換する場所さえあつ

た。自分さえ生きて帰国するためにはどんな事でもし

て引揚げた話、戦争という悪魔は人間を吸血鬼とかりたて地獄絵巻さながらの世となりがちです。生母はそんな方ではないとお会いし話して強く感じました。それは彼女のその後の行動によっても証明されています。

引き揚げ時に委託書、預り証文を取り交し、それを後生大事に保管、昭和四十七年日中友好条約成立連絡がされる世になり中国語の手紙代筆幾度の努力精進し、官庁関係、団体などへの手続きなどそれは大変な手数が必要だったでしょう。

実父は戦後現地で死亡、生母は引き揚げ後再婚、よくも証文が保存されていたものです。その甲斐あって昭和五十二年九月二十七日孤児は引き揚げて来たのです。私たちの面談はそれから一か月後で片言の日本語、中国語、身ぶり手ぶりの動作筆談私の忘れかけた中国語で別室をもち夜半までかかりました。

三歳孤児の養父母となり、そのうえ中学校まで進学の話、私は意地悪くピタゴラスの定理の三角の解説を求めました。彼は紙上によどみなく、ペンを走らせまし

た。驚き入りました。

卒業後、撫順炭鉱務め、帰国前日まで精勤しその間二回ほど鉱内爆発あり、非常に恐ろしかったと目がるものでした。帰国引き揚げが出来たのは養父病死、養母が再婚されたので付け加え、撫順には今でも日本人と称される人が百人以上いるようです。彼らは日本の姓名、父母、縁故者もわからないそうです。私は日本語を勉強し通訳になりたい。今は東京で生母の姉、伯母さんの家で手伝いをしながら日本語学校に通学しているとのこと。彼の前途に祝福あれと祈りながら別れましたが寝つかれず、三歳で避難中ハルビンで病死した長女が枕もとに来て、いたわしく秋の夜の旅のひとこまでした。

私は昭和八年中学を卒業、その春上京国士館在籍満州鏡泊学園転入八月一日東京を出発、神戸港より乗船、仏教婦人会の盛大な見送りを戴き波路荒い玄界灘をものともせず大連入港、大陸に第一歩新京を経て教化に仮住い。半年後現地に、ここに生死をかけた波乱万丈の青春が訪れるとは神も知るよしもありませんでした。

ここは満州事変後匪賊が跳梁跋扈治安の悪い奥地の松花江の支流が溶岩で堰き止められた鏡泊湖で、風光明媚幽邃の仙境に満州国最初の私立大学、学園村を母体とし大陸に雄図を抱き炬火をかざした学園でしたが、「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」の古諺があります。満州国の五族協和、王道楽土の建国の理想も一部漢人の理解を得られず、匪襲による山田総務先師学友護衛軍人一行の大廟嶺事件、創業中途戦死、その後治安悪化、夜は眠れぬ数か月連絡絶、資金欠乏、食糧難となり経営困難閉校のやむなきに至りました。

自分の人生は自分でできりひろくほかありません。私たちが開拓希望者は拓務省移民団採用方をその筋に申し入れ、第四次武装城子河移民団の基幹移民班と決定、同志四十五人（軍入営適齢者含む）私は先遣隊となり同志七人と共に昭和十二年十一月密山県に本隊一か月後に入植し、鏡泊郷編成蔬菜水田普通作建築本部要員を互選し、同志一丸となり日夜開拓精進、初年度に驚くほどの実績、夜は淡いランプの光でが印刷の開拓

誌発行、誌名を「拓荒」不肖ながら名ばかりの編集長、もちろん無給の同好誌みたいなもの、開拓文学堂農、政治経済の寄稿集で関係機関に配付、それが満鉄調査部入手するところとなり、北滿農業コンサスは当時貴重な資料となりました。

これは開拓日誌をもとに調査統計集積したもので満鉄調査部に採用され、その膨大な資料は戦後、国務院に押収保管と伝え聞きます。

開拓地も春が来て家庭もぼつぼつとなり赤れんが造りの個人住宅を計画実行、営農の基礎もかたまりつつある時、地区内に無煙炭埋蔵判明、国策上移転のやむなきに至り吉林省舒蘭県地区に転入植となりました。農業と鉱工業、近代国家ではその比重が鉱工業に重いようですが、人間社会の将来はこれでよいか、考えざるを得ません。満州開拓史上特異な開拓団となり一時話題となりました。私の開拓はうよ曲折です。

丁度その時突然団長より義勇隊訓練所指導員の要請がありました。佐藤修さんは当時寧安訓練所長兼務で、彼は団員の身分は保証する、一期三か年でもよい、基

幹中隊のような特殊中隊、満州の風土、開拓教育に熟知熱情をかたむけてもらいたい、たつての懇請でした。生死を共にした三年有余の同志との、しばしの離別、緊急なことが出来た時はいつでも帰国また訓練所に新風が必要要請の時は私に続いてほしい。開拓の大道を共にまい進する決意に心よく送り出してくれました。

中隊編成、引率渡満のため急遽茨城の内原訓練所行きてです。五か年振りのしばしの帰国、郷里で両親たちとの一夜、私の行動にあっけにとられていました。東北、関東、中部、北陸、十県よりの訓練生十四歳〜十八歳の青少年、銃にかえて鋏の柄かついだいたいけな寮二百五十人、三人の指導員引率満蒙開拓青少年義勇隊寧安訓練甲種訓練所は無人の原野、狐、狸、狼、熊などの先客のあとに新天地創建村生み国生みの胎動、開拓の苦難使命感、開拓精神、加藤開拓イズムの農本主義的教育と営農、心魂をかたむけ、寝食を共に三か年訓練修了義勇隊開拓団移行を機会に一応城子河開拓団に帰ることにしました。

昭和十六年帰国早速個人独立農耕準備、耕馬、農具

種子など仕事は多忙開拓の経験こそぞと営農の遅れを取りもどす血みどろの農作業で同志の助成を得、どうやら二年間で拓友の諸氏に追い付きそうになり来春個人住宅計画資材注文もぼつぼつと努力している最中、昭和十九年一月十日奉天通信隊召集となりました。

開拓地では畑、宅地の配分も終わり、用水路の構築配分、開拓協同組合移行も目前で農地の保管運営などの法規制定など目前にして遅れた営農が一段落すれば開拓の壮大な夢に実現達成に踏み出す心組みを持っていたのです。もちろん召集をうんぬんし死を恐れるものではありません。死は天命に在ると鏡泊時代の開拓哲学としておりました。

六月牡丹江転属、南方派遣となり、敵の魚雷飛行機からようやくやく逃れ比島ミンダオ北端カガン上陸第四航空軍航空通信部隊井之上通信中隊でした。当時の戦局は悪化、戦いに敗れても転戦とか称しごまかしている戦局で制空、制海権は敵の手中となり兵站補給なく自活自戦、私は通信業務はそっちのけ農場班長となりスコップで芋作りを命ぜられていましたが、米軍上

陸の報に放棄奥地転戦です。航空通信隊ですが日本の飛行機は一機も見ません。来襲する米機ばかり、不思議でなりません。戦局の急迫隣島のレイテ島戦での大敗。ダバオ大空襲の惨状は私たち兵さえ知るようになりました。

ミンダナオ島最大の陸海軍最大基地がダバオ五月三日我が兵団駐屯地カガヤン五月十日米軍上陸、第三十師団両角葉作中将の七四連隊が駐屯していたが戦わずして東部山中に退却（師団主力はレイテ戦で全滅していた）。

第二飛行師団寺田中將も連隊と共にデルモンテ方面山中に我々山下大隊井之上中隊は同道山深く米軍より逃れた。

退却するも我々通信兵は命より大切な通信機材、燃料が優先され病人負傷兵はほっぽらかされ哀れだった。のち自決した。

頑強な者が通信機を背負い前方二人が背負い人の腰に付した綱を引き後方両側を二人してささえ五人一組となり一キロごと交替で山奥に運び込んだ（後日談に

なるが投降交渉のみぎり貴軍はどんな方法で通信機を持ち運んだか、巨大な山猿をみつけたのか、笑って君たちは山猿だなあと不思議がっていた）燃料のガソリン油などは二人一組悪路を転がし坂下で竹筒三本束ね一斗入れとし各自背負い山を登った。

思えば我々教育召集の補充新兵三十歳を過ぎた妻子ある老兵を遠く戦野になげ出し食糧、医薬、兵站（へいざん）補充、野戦病院もなく、棄民、戦場、世紀の生き地獄草や木の芽を噛って自給自戦。逃避退却、生きようとする本能、野犬のように食物をあさり求め人肉まで食う地獄、蛇、猿、トカゲ、蛙、昆虫などなんでも食べ生きようとした。

我々は直接戦闘兵でなく通信兵であったので米軍と戦闘による戦死はなく、病人負傷者の飢え死にか自決で乗船上陸時の半数近くが亡くなっている。言語に絶する戦地の惨苦であった。

八月十四日ころになると何か戦局のことで日本であるらしい。停戦でも早くなるとよいがの声もれて来た。十五日放送はよくは聞こえない。連合軍の条件を

受け入れるとか、嗚呼何だ無条件降伏、日本はまいてしまつてお手上げ嗚咽、落涙頰や頭を自分自身殴る者、狂い回る者、中隊長が真新しい肩章少佐で来た。誰も起立敬礼する者はいない。座したまま動かない。彼はおもむろに開口一番戦いは終わった。あとは小声でよく聞き取れない。飛んで行ってぶんなぐりたい怒気がこみ上げた。

草むらに寝ころび生きて虜囚の辱しめを受けずか、死、死、死だ。故郷の老父母、満州広野、開拓地の妻子、涙がほろり、天空には浮雲が嗚呼あれに乗り駆け寄りたい、握りしめた拳が濡れるばかりであった。ところが翌夕突然大隊本部命令、すぐ来い。中隊伝令となつて一度行ったことはあるが直接呼出しとは、何が何だか解しかねて飛んで行った。突然、中尉以下六人投降交渉委員となり明朝出発下山せよとのこと。私は中国語は心得ているが英語は駄目である。私は返事しないところが君は命がほしいのか大声一発、中尉、曹長各一人、軍曹二人、兵二人、計六人である伍長はいなかった。

私は農場羊作りの時兵長に昇進班長になっていたばかりで委員の中では階級低く福田、同年兵は佐賀業隠の出である。「なあにおれだつて筑後柳川立花藩、満州広野開拓馬賊匪賊にまみれた命知らずの男だ。命なんてなんだ。今更ほしくない。万難に活を見出し死に所を恐れるものか少しぐらひは禪の妙理、空の道は心得ているぞ」委員にならざるを得ず、前代未聞ともいうべき投降交渉委員、二日ばかりで山から降り、白旗をかかげ敵の最前線に髭をそり真新しい禪、軍服は軽装の防着用のボロボロ服でした。

ジーブ付トラックで前線司令部、途中我々を見つけた土民は死刑の手まね罵声を浴びせるのでした。「降伏条件、投降方法、処置などで、部隊は天皇命令により降伏する。まず取り計らいはどのように、話のいかんによつては覚悟が」「まあそう空威張りされなくても、食糧、医薬もなく餓死、病死はこちらではわかり過ぎてゐる。ジュネーブ捕虜取扱条約に準じて処置する。殺すとか重労働はさせない。傷病兵は入院治療、米軍は博愛主義です。一応は収容所にもちろん入るこ

とになります。貴部隊は通信隊、心配はいりません。その点隊長に伝え下さい。もう無益なこととは止めましょう。神様は平和を願っています。まあ食事でもゆっくり」ノドから唾液が出そうな食事、数か月もろくなものは食べていない。しかしちょっとまで「武士は食わねど高楊枝」だれも箸をつけない。

交渉終り最前線までジープ送り、土民ゲリラ襲撃に備えてか軽飛行機護衛の配慮、パン、肉、野菜の缶詰煙草さえ缶入りで持ち得るだけの給与にあずかり無事大役を終わり復命、下山降伏となった。下山前ちょっと不思議なことがあった。将校、下士官が一階級の昇進、敗戦終戦何事だ。兵はそのままで、交渉委員の佐賀の福田君は伍長、私にも交渉重責、特進伍長、私は強く辞退した。私のごとき凡人には考え得られぬことである。

下山開始、死出の山路みちになるかと思った。山坂四度通る。地獄の一丁目、二丁目、三丁目、三途の川になるかと渡った川、川岸、大樹の下、ほら穴の入口付近に白骨化したおびただしい友軍のむくろ通信機、兵器

も捨て自分の体だけ降りればよい。しかしこれが弱りきった兵には大変なことであった。つまづき倒れ、はい出、ころび山坂を降りる。自分の体力を振り絞って歩くのが精一杯で負傷者、病人の面倒など看取られたものでなかった。背負って歩く元気な兵は一人もいない。仕方なく木陰や竹藪に横たえて置くほかない。悲惨だが見捨てるほかなかった。強い兵はほとんど降りて適當の休息、食料を探し下山投降にそなえた。食料なく新芽、草、芋の茎葉を探しながら、九死に一生の投降下山であった。

自分たちで収容所建築といっても丸太を打ち込み鉄条網を張り、望楼、機銃座。テント張り、立木製寝台、食事場など野戦の急造建築、その中に入れられ捕虜生活が始まった。

将校は彼らだけ別の収容所であり引揚げまでどこにどうなったか知るよしもなかった。下士官と兵は一緒に平等であった。

召集時古年兵の若造たちが新兵召集の私たち老兵をいためつけた者はかわいそうにびくびくし誰も丸腰で

軍紀などもろろなく、だれも平等で古年兵などを江戸の仇を長崎で討った人もいたようであった。

収容所では降伏交渉の話が良く守られた。病人は入院させ我々は軽労働、キャンプ掃除、小石、塵屑、小枝集め、砂入れ、倉庫整理、トラックに荷の積み下しなどで、汗を流す重労働は少なく米兵は鷹揚な人が多かった。戦勝の故でしょう。しかし時間は強く厳守させられこれには教えられ、忘れることは出来ない。

私はこれを逆手にとってしてやったりと天狗になり、皆で目を白黒させた捕虜のむこうみず。明日のわからない収容所生活さぼるだけさぼれ、それは小丸太を運んでいる時、もう五時になったではないか、そうだ道側に置いて帰ってよろしい、こんなこともあったのです。

食事は簡単で白米少量のシチューで腹グウグウで、倉庫整理の時は生卵、缶詰ビールをこっそりちようだいしました。相撲を取って彼らを喜ばせる時は賞品としてパン、ミルクをたくさん支給されたので、皆に分配し感謝されました。

米軍キャンプ休日に清掃の時など寝ころんでいる彼らに話かけると、新聞、雑誌を差し出しお前の郷里はどこ、広島・長崎には大きな爆弾が投下され一発で幾十万人も死んだぞ街は飛び散ってしまったぞ妻や子はいるのか。

満州はソ連軍が占領してしまい、兵隊は捕虜になり寒いシベリアで重労働だ。お前たちはここで安心し幸せでないか、その内に日本に帰国させるよと大笑いするのです。煙草やチョコレートなどせがむと気前よく差し出してくれていました。彼らのキャンプには原住民の婦女たちも出入りし洗濯やダンスなど適当に戦勝の享楽に戦地を忘れる時も見受け、我が日本軍内務班とは天と地の差を感じました。

日常英会話も少しは理解されるころになると年内に復員帰国されそうだがの特種が耳に入るようになり、どこから出たか不明でしたがその話題に湧き捕虜の悲痛などぶっ飛ぶのでした。

昭和二十年十一月三十日米軍貨物船で浦賀上陸富士山を望見した時は涙を禁じ得ず甲板に座り込み落涙す

るばかり、この涙は敗戦捕虜復員悔悟の涙か、生きて  
帰り得た生還の涙か、私は言葉を知りませんでした。

上衣の背はPWの刻印、半ズボン吹きすさぶ潮風に  
また関東師走のからっ風、身も心も凍えるばかり、D  
DT白粉を頭から振りかけられやっとな開放されたが、  
東海道線は不通、東京に出て中央線を利用一路郷里、  
博多、大牟田を走る西鉄に乗換、車掌に乗車券提示請  
求カットとなりおれは戦地から復員中つべこべいうと  
ぶっ飛ばすぞ大声に逃げて行く、復員エピソードの一  
駒。

復員帰国したものの妻子は満州開拓地から引揚げな  
く、役場や県庁は皆目不明調べる術もありません。母  
はどこから聞くのか満州はソ連軍が占領し、日本兵は  
捕虜となり連行され、重労働。残った婦女子は食料な  
く飢え死に、満人は反乱暴動で日本人は毎日殺されて  
いる。役所ではどうにもならないなどの話に朝夕仏間  
で線香の煙に包まれ涙を流していました。私はどうす  
ることも出来ず、親の脛齧り、復員ぼけでした。

母は戦後の困窮にもヘソクリをはたいて東京に妻子

の動向調査を勧めてくれ、祈る心で妻子の消息を求め  
敗戦後の混乱と戦禍により荒れ果てた東京に飛び、政  
府所管庁、関係団体、新聞社、GHQにも連絡をとっ  
てみましたが、皆目不明。特に開拓民の惨状を聞かさ  
れ、ソ連占領の惨苦資料写真に涙がこぼれるばかり、  
救済の術なく調査渡満も出来ず、政府はなすこともな  
く敗戦に痛憤するばかりでした。米兵相手の街の女が  
真昼から皇居外苑公園など至る所で衣食住の糧を求め  
る行為には嫌悪し、啖でも吐きかけた衝動にかられ  
るのです。

その折引揚援護局の手伝いを勧誘されましたが妻子  
の未引揚げでそれどころでなく仕事は手に付かず親の  
脛齧りでした。

戦後十か月、飢えと寒さ流浪の開拓難民となり長女  
の遺髪をふところに丸坊主の男装、傷心しきってぼつ  
ねんと妻は帰って来ました。

敗戦復員ぼけから早くぬけ出さねば、さりとて今更  
武家の商法でもあるまい。高禄をはむようなだても  
無く、男一匹やくざか。これとてまず親兄弟の血縁を

はじめ自分自身人間を捨ててかからなくては、あれや、これ四苦八苦数か月、日本社会に生きるむつかしさにほとほと悩みました。妻の母方の生家が田舎の旧家で少しばかり田畑がありました。老齢で後継者無く農地を小作に出し、敗戦後の農地改革（一九四六年）により不在地主の全所有地や在村地主の貸付地（一部保有を認む約八反歩、北海道四町歩）で国が地主から強制買収し、小作人に売り渡したのです。そのような戦後の日本、義理の伯父、妻は引揚途中子供を亡くし体

ひとつ無一文となり生きて死の引揚げの苦勞に実母はしのびなく又これからどうして生きるのか私たちへの危惧懇請もだし難く百姓に生きることになりました。姓が変わり私たち二人は木下姓から大瀧姓それぞれ再婚かと問われ苦笑した日もありました。借金三万円で役牛を購入、脱穀機は石油発動機の中古品で発火悪くほとほと困り近隣の熟練者に頭の下げ続けました。

さて農地改革には無理があったと思います。筑後は永小作権など少なく東北関東と異なつて大地主などとの長年月の小作契約でなく五町歩以下の小地主が多く

明治以後の勸業奨励によつた汗の結集の農地取得で契約の実情はしばらく耕作させてくれ、作つてくれなにかの口約束でした。十町歩以上の地主は少なく私の蒲池村では二人に過ぎません。

又隣村不在地主は畦ひとつが境で畦は針一本が理論的です。こんな配慮があつての処理で合理的であつたでしょうか。どうかと思われてなりません。

地主には国債年賦償還で買収価格は一反歩（三百坪）一千円内外です。その後のインフレはすざましく国債も金銭同様紙屑のようになりました。

また、在村保有の小作料は現物禁止、毎年公定料金の現金支払い小作人は三か年の猶予があつたのです。米三百升くらいの収量に小作料は数升で足る世の中になりました。納金とインフレによる米価高騰によつたのです。

それでも心ない人は旧地主には未だ漬物石がある。人の心のあさましさに身心がしめ付けられるのでした。これは旧家では沢庵漬のような漬物は一か年分準備するのでたくさんの漬物に用いる重し石のことです。

戦時召集による小作契約の買収は無効なのに農業委員会の勇み足か奮勇の処置であったか。こんな農地の買収もありました。

ともあれ農地改革はGHQが地主にも戦争責任があると考えたのでしよう。

小地主は農地改革により困窮し生活保護が必要と思われるような人が残された保有地を生きたため手放すにも買手は小作人に限定され、小作人が購入する意志がない時に他の農業第三者への買却には小作人の承諾が必要で、そのためには農地の半分か買却費の半額を小作人に渡し暗黙裡に解決したものです。

農地の移動は一片の法規で規制されるものでなく経済の原則に生きていることを知って戴きたいものです。

農地を農民に解放し農村の民主化に反対するものはありません。しかし人権の尊重、平等、法治国家の法の適用買収がなされたか、などは疑点のある所でもっと論議された民主国家でありたいものであります。

私は百姓として日本で再出発、まず農地の確保そのためには合法的手段で農地の返還を得、どうやら耕作

農民として一人立ちが出来るようになり生活が少しずつ安定しましたので個人的にも開拓引揚者団体の会合。東京桜ヶ丘にそれぞれの開拓碑建立、慰霊祭茨城内原に眠る加藤完治墓の参礼などは生きて復員引揚者の責務として来ました。郷土にあっては農村社会に余力を傾注し平和と日本再建の手伝いをし今日まで生き長らえています。集落農事組合設立国庫助成、学校（幼稚園、小、中学校）土地改良区、農地農道整備、公民館、民生委員（県）、農業協同組合、市町村合併など農村での世話にはほとんど手をかけました。

しなかつたのは地方自治体の議員及び首長でした。もちろんその任ではありません。それに乞食と泥棒ぐらいで乞食三日すればやめられぬ諺があります。乞食の修業をしていたらあの世の閻魔様がほうこれこれお前極楽ゆきじゃ、法名「釋愚猛開拓居士」高笑、極楽浄土を願って今更乞食修業でもあるまい。源信僧が説く地獄結構です。ただ愛着たち難い大地、日本農業の将来が心配でなりません。またせっかく手に入れたこの平和いつまでも平和であるように願わずにいられます

ん。

私のこの愚稿もそれを願ってのペンの走りです。満州開拓地より引揚げた妻は先年病死しましたこと付記せずにはられません。

有縁の皆様御健勝に、紙上をお借り多謝。

### 【執筆者の横顔】

大瀧氏は信心きわめて厚い農家に育った、大正三年生まれである。父親は四国八十八か所の巡礼を半年もかけて手に金剛杖を握って、この杖は弘法大師さまだ、大師さまと二人で巡礼しているのだ、有り難いことだ、と言ひ、母は真言密教の信者である。こうした家庭に育って中学を卒業したころは、お経のほとんどを暗唱していた、記憶力抜群の青年だ。

その当時、中国大佐の満蒙の天地に暴戻なる旧軍閥がばっこして大衆が困りはてている情況に、同じ黄色人の亜細亜民族は一家族にひとしいもの、これを救わんとして起ち上る学徒が大勢いた。大瀧氏も同じ志向者である。

時あたかも国士館の山田悌一理事は、宮崎県都城出身で、満州国吉林省の鏡泊湖畔に文教部大学令第一号で鏡泊学園創設するとの報道をうけ、大瀧氏は、われ死所をみつけたりと叫んで、昭和八年学園に入り渡満した。

建国日浅い満州の治安いまだ完べきではないが二百人の健児とともに警備に当たりながら晴耕雨読、訓練研究に学園並びに村落建設に意気軒昂で成果あげつつある中に匪襲にあい山田悌一氏外十四人の同志が殉職するなどの惨憺たる悲境にあった。そうしたたびごとに大瀧氏は肩に袈裟をかけ、手に数珠を携えて阿弥陀経から諸々の経文を朗々と読経する大瀧氏の真しな態度は悲痛きわまりない同志の感情をやわらげ、亡き恩師盟友の靈魂にとどかれたと思う。

そうした在家僧侶のごとく特技をもって彼はみんなから尊敬されていたが、昭和十九年一月召集をうけ、遠く南方のレイテ島で悪戦苦闘、八月十五日、玉音を拝聴して米軍に投降、二十年十一月、九州福岡県柳川市の我が家に復員、おかれて妻は満州の開拓地から愛

児を亡くして九死に一生の難行を経て柳川の実家で夫婦抱きあって泣く。夫婦再会できたことは、わが家の信仰心やどる慈悲あればこそと、八十歳をむかえた大瀧翁の感激の弁である。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

## 北溟の空

佐賀県 清水 照子

一か月の青春

兄が結婚したので、私は家のことからやっと解放された。母は私が十二歳の時亡くなった。父には後妻が来て子供も出来、連れ子もいる。家の中が面白いかないので父は二世帯にした。我々兄弟の面倒をみてきた。妹や弟の母親代わりをつとめた。兄は私にお前は今日から好きなことをやってくれと言った。

しばらくけいこ事をしていたが、頼んでいた職が決

まり勤めに出た。住友生命でまだ支店でなく支所とあった。本社から月給三十円也の辞令が来た。

私は今二十歳、二十三歳まで頑張ろう。そのうち私の白馬の王子さまが現れる、それまで私の青春だと胸ふくらませて出勤した。

会社に勤務して間もない日に、佐賀高女の久久保先生より電話で、帰りに学校に寄ってくれとのこと、先生は私の縁談のこととお話したいとのこと、どこまでも恩師の親切さに心をうたれた。度々の電話のあと、濠端の大楠の下で待っていた。先生は来るなり、今日は本人が見えているから会ってくれと言われる。先生ひどい、こんな素顔なのにやはり女心である。いやそのままでいいよと言って、さっさと行かれた。私は髪だけ五本の指で撫でつけて、楠の下から歩き出した。運動場の向こうに、背広姿の人が立っている、それは彼だとすぐ分かった。歩きながら、背は高い方だ、体格も良さそうだ。近くになって一礼して宿直室へ入る。久久保先生、角先生が話を向けられるので話したが、ご本人はチラッと見上げただけで、一言も話はな